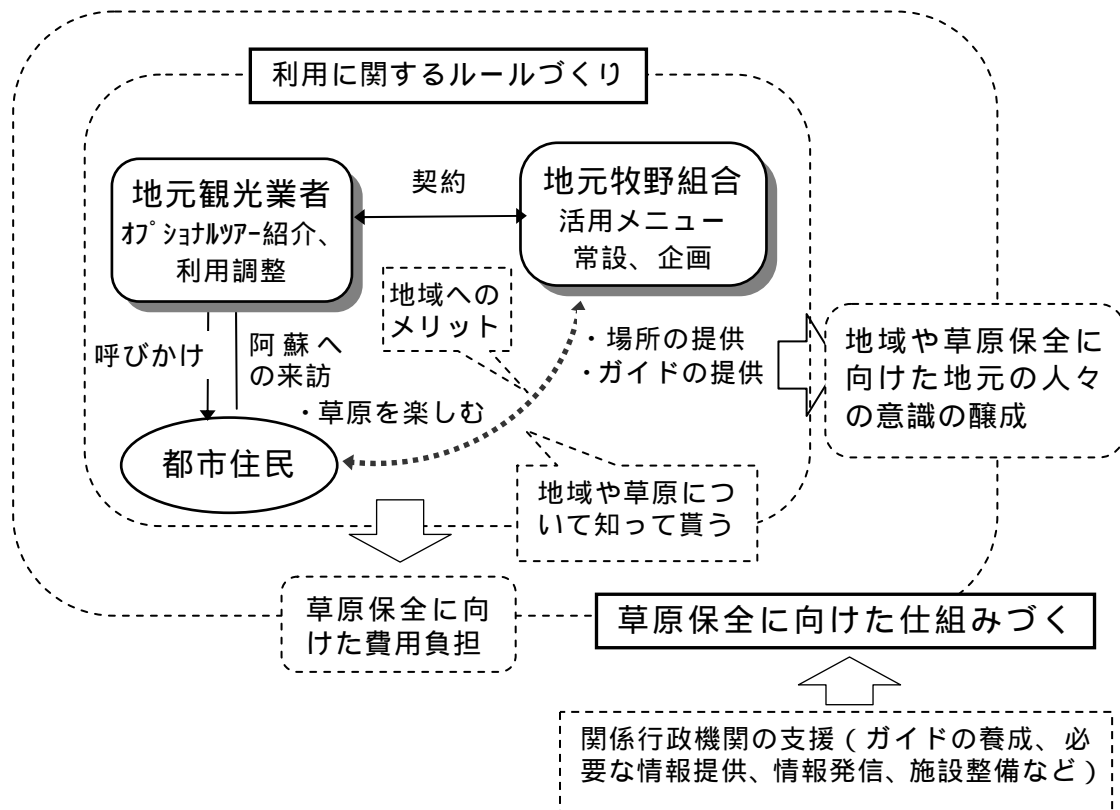


体験型ツアーとしての草原利用の仕組みづくり検討例

関係者の役割と必要な仕組み

- ・ 地元牧野組合：草原利用のメニューを用意するとともに、立ち入りにあたってガイドを務める。
- ・ 地元観光業者：牧野組合との契約のもと、都市への呼びかけ、宿泊者への草原利用のメニューの紹介、受け入れを行う。利用者の管理、ツアー費用の精算等を受け持つ。



ホテルなど観光業者とのタイアップで受け入れる仕組みを作ることを前提とした活用例

- * 春の湿原ツアー。希少種保護の問題から、モラル面で人選が必要と考えられる。支援ボランティアに対するお礼として行うことも考えられる。
- * 地元や熊本市内の小学校の遠足・環境学習・総合学習の場としての活用。
- * 「草の道」を利用して牧場まで歩く。パークボランティアなどのガイドで地域の生業・文化に触れながら石畳の道を歩き草原に至る。
- * 複数の牧野を利用した草原歩き。複数牧野の協力により草原景観や自然観察を楽しむ草原トレッキングのコースを設定して実施する。
- * 北外輪から久住の山々を望む。例えば、車で格納庫まで行き周辺で、波打つ草原の広がりや久住連山の景色を堪能し、歩いて帰ってくる。
- * 森林境におけるバードウォッチング、など。
- * いくつかのコースに分散して楽しんだ人々を、例えば監視小屋前に集め、農産品を持

ち寄った市の開催やバーベキューなどにより交流を図ることも考えられる。

牧野に立ち入るために必要な条件設定やルールづくり

- 具体的に立ち入り可能（実施可能）と思われる場所の設定。
- 立ち入りが可能と思われる時期の設定。
- トイレなど立ち入ることにより必要となる施設の設置。
- 入場者のタイプや人数の限定。例えば、小中学生の野外活動や修学旅行など教育的目的のみなど。
- 立ち入りに際して、最低限決めておく必要がある事柄。例えば、ゴミの持ち帰り、動植物の採集禁止、指定場所以外で火は使わない、など